

らい 来ぶらり 13

図書館小考

図書館長 森永 毅彦^{*}
(法学部教授・西洋政治思想史)



学生時代に、ある思想家に興味をおぼえて、彼のすべての著作や発言を調べてみよう、と図書館に通いつめたことがある。著作は、著者名目録を引けばすぐわかるが、題名も収録誌も不明の雑誌論文や対談・書評などはどうしたらいいのか。『雑誌記事索引』の存在も知らない、まったくの手探りだった。たとえば、たまたま『展望』への寄稿を発見すると、もしや、と思ってそのバック・ナンバーを全部借り出して目次を繰ってみる、といった具合である。複写機もないころだから、大事な箇所は幾ページにもわたって筆写する。思えばずいぶん無駄なエネルギーの消費もあったわけだが、このときの苦勞と収穫は、私にとって、いまでも貴重な資産である。

今日の学生諸君は、このような余計な試行錯誤を、容易に省くことができよう。図書館のレファレンス・サービスがかなり行き届いたものになっているからである。毎年、「来ぶらりセミナー」では、「雑誌記事の探し方」や「文献目録の活用法」といったガイダンスを行っている。参考係に聞けば、あるテーマについてどんな本や論文があるか、それを入手するにはどうしたらよいか、可能なかぎり答えてくれるだろう。もともと本誌『来ぶらり』は、図書館の提供するこうしたさま

ざまなサービスをひろく学生諸君に伝え、学生諸君がこれを、自己の知的活動の道具として意欲的、主体的に使いこなしてくれることを念願して、発刊されたのである。

元来、レファレンス・サービスは、利用者が、もとめる文献や情報に迅速的確に到達できるように、利用者を援助するサービスとして、19世紀末以来、欧米各国で急速な発展を遂げたものである。とくに今日、おびただしい量の出版物が氾濫するなかで、利用者が方角を見失ったり、押し流されたりしないで、目的地に達するためには、もはや不可欠の道具となったといつてよい。

しかし、すべて物事には、楯の半面がある。利用者へのサービスの充実は望ましいことであるが、親切が行きすぎると、学生の自主自立をおかすことになる。本来、利用者の自立をたすけるべきガイダンスやオリエンテーションも、それになれて、利用者の精神が受身になり、自分の目で物を見ようとする姿勢とが、労苦を惜しまぬ気力といったものを、失わしめるおそれなしとしないのである。

大学図書館を、学生諸君にとってもっと魅力あるものにするためには、今後も、さまざまな形でのサービスの拡充がおこなわれなければならないであろう。それだからこそ一層、その拡充の「意味」が、また学生諸君の自主自立の意味が、くつかえし問い直されねばならないであろう。

^{*}本年4月1日から、大学図書館長に就任。

まだ学生だった若き日の吉本隆明氏に、晩年の太宰治は「闇屋になれ」と勧めたそうです。それから10数年後、吉本氏は当時の学生に「精神の闇屋」を説いています。「闇屋」はもとより、「精神」と言う言葉も今では死語になっているのかも知れませんが、大学生活を考える時、この言葉には、何がしかの魅力が感じられます。今回は、この3月に「闇屋」を卒業した先輩からの、新入生へのメッセージです。

「正しい」学生のあり方教えます！

法学科卒 大畑 豊

野暮なこと言うようだけど、やはり大前提として、大学は学問を修めるところであり、真理の追求をするところである、と言うのが正しいようだ。さらにつけ加えるならば、大学での勉強は独学が基本であり、その補いとして講義・ゼミに参加するのがいちばん正しい勉強の仕方であり、学生のあり方だと思う。

一方、机上の勉強だけで終わらせたくない人、いろいろ体験する中で「人格」を向上させたいと思う人、あなたも正しい。「せっかく高い授業料を払ってんだから」などと考えずに unnecessary 講義はどんどん休んで、いろんな活動に参加しましょう。

とにかく、のび・うっ・かうを極めたいと思っている人、あなたもやっぱり正しい。大学は8年までいられます。ゆっくり楽しむべし。

世の中にはいろんな「正しい」人たちがいると思う。そして大学がそんな人たちが溢れる世界になったら、もっと楽しいところになると思う。新入生の皆さん、「正しい」学生になるまでちゃんとがんばるんだぞっと。



さて、これを読む君は晴れて4年間の自由な航海への切符を手に入れたわけだ。この大海原にどのような航跡を描こうと、それは全く君の裁断に任されている。さあ君はどちらへ針路を取ろうと考えているのだろうか。どちらに向かおうと、それは君の勝手だが、この大学という海原には、君と同じく勝手をしたい船がいっぱいいるし、もちろん前に立ちほだかる障害もある。でも、東に行きたい君に、西に行けと命令する人はいないんだ。

航海を終えようとしている僕には、忘れられな

こんな女の子の4年間

国文学科卒 末広由布子

私の過ごした4年間は、「キャンパスライフ」なんて洒落つ気のあるものではなく、「学生生活」の方だった。

ただ、誇れるのは、いつも自分を飾ること無く、ありのままにさらけ出していた事で、この点に関しては、非常に他人に対して誠実だったと思う。自分を自然な状態にしておくことで、人をどんどん受け入れ、自分を少しでもリッチに思っていた。「この子は飾ってこの程度だから、地が出たらどうなるんだ」と思われているのを随分感じたが、逆に、それでも寄って来てくれる人は本物だ、と考え、実に伸々とした人間関係を築く事ができた。

4年間はあくまでも限られた時間だけれど、気持を開いて、素直に物事を吸収していく自由さと、偽らぬ自分を人に見せられる明るさ、そして好きな事に対する貪欲さがあれば、自分の外の世界も内の世界も無限に広がって行くと思う。

4月からS商事に勤務。今までの自分を生かせたら……と思う。

いい思い出がいくつかあるし、また、やり残したこともいっぱいある。もっと遊びたかったし、あちこち好きな子と出かけたつもりも多かった。でも萩尾望都の言うように「できなかったことを悔やむのは女をくどきこねた言いわけのような」ものだし、考えてみればその場その場の

国文学科卒 沼澤康夫

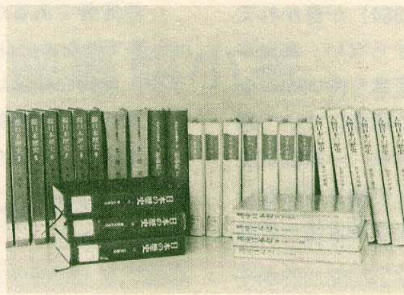
選択も、その時には最善であったように思える。すてきに自由だった航海を終えた後は、大学院に進学する予定なので、君に会う機会もあるかもしれない。でも自分の帰る港を見つけてしまった僕は、おとなしく君を見守りたい。

従来ここでは、稀覯本など、普通では滅多に人の目に触れない蔵書が紹介されてきましたが、今回ご紹介する日本歴史の叢書は、開架されていて、実際に利用されている図書です。

ひとくちに、日本歴史の叢書と言っても、各巻の構成の仕方や、主題とか時代区分の方法などにそれぞれ特徴があり、一様ではありません。たとえば中央公論社刊の、『日本の歴史 全26巻』や小学館刊『日本の歴史 全32巻』などは、各巻1人の著者の書き下ろしや責任執筆によるもので、読み易い通史と言えましょう。

この他に、特徴的な叢書を挙げますと、原始から現代までを扱い、世界史的視野の中で日本全史をとらえた『岩波講座：日本歴史

日本歴史の叢書・全集



全26巻』(岩波書店)、戦後の新しい日本人像の確立をめざす『講座日本史 全10巻』(東京大学出版会)、政治・法制・対外関係など各部門史ごとにまとめた『体系日本史叢書 全24巻』(山川出版社)、シンポジウム形式により、日本史上の問題点をさぐる『シンポジウム日本歴史 全23巻』(学生社)、各時代から注目すべき人物6人ずつを選び、通史では描ききれない、歴史の中の実像を浮き彫りにする『人物日本の歴史 全20巻』(小学館)——などがあります。

これらの叢書の中からどれかを選んで読み通してみると、面白いのではないのでしょうか。読み進んでゆくうちに取り上げられている原典にも、直接当たってみたいと思うようになれば、歴史への理解も、一層深まるでしょう。(和書係 橋奥雅子)

著者、ロダンについて、多くの人は『考える人』の彫刻家というイメージを抱いているだろう。オーギュスト・ロダン(1840—1917)はパリに生まれ、その影響がフランスのみならず、全ヨーロッパに及んだ近代の巨匠。本書は、晩年の1914年に、彼が心から愛した“フランスのカテドラル”への讃歌をつづったものである。

フランスの聖地を巡礼したロダンが、美や芸術の本質とは何かを、みずみずしい感覚とシンプルな言葉で表現した、香り高い詩編というにふさわしい作品だ。自己の愛する彫刻への情熱的な憧憬をもって書かれた芸術論であり、一種の宗教的な冥想の書でもある。一流といわれる人物が、どんなに多くの事を試み、悩み、色々なことを考えていたかがわかる。また、読者は、彼がこれほど優れた詩人、文章家であったことにも驚

かされるだろう。

「力こそ、優美を生むものである」——ロダンの彫刻は高度に写実的でありながら、さらに内面的に深め、生命や力の表出をめざした。作品には深い詩情がただよっている。「フランスの大聖堂は、フランスの自然から生まれたものである」。「大聖堂はすべてのものを結合させる錠だ。それは文明の絆であり、規約だ」。「ここではすべて愛である」——この書の中では、ロダンの、生命の本質への鋭い洞察と讃歌が溢れ、西欧芸術の精髓が集約されている。

ハーバート・リードの適切な解説と共に、素描も多数収められ、建築や彫刻にほとんど知識のない人にも理解しやすい。精神より物質に心を奪われがちな現代人にとっては、新鮮な感動を与えてくれる好著といえよう。[新庄嘉章訳・創元選書] (洋書係 中島亜子)

ロダンに寄せて 『フランスの大聖堂』を読む

参考室あれこれ

ベルギーから届いた1通の手紙。差出人は、ベルギー王立図書館のアメリカ研究センター。文面には、「ヘンリー・ミラーに関する著作を2つ探している。Gakuin大学で発行、ベルギーでは入手できないので、貸出しをお願いしたい…」続いて、著者名（OKUMURA Osamu）、書名、出版社（Gakuin大学、片方には、Aoyama Gakuin大学）、出版年（1962と1964）が書かれている。目録類で調べたが見つからない。青山学院大学図書館に電話で照会。返事を待つ間に『全国大学職員録 私立大学編』で著者について調べる。「奥村治 経済学部経営学科 一般教育英語担当」とある。ふと、「紀要」の論文ではないかと思い、カードをひく。『青山学院大学一般教

育部会論集』が目にとまる。最初の論文は、第3集（1962年）に掲載されていた。もう一つの論文は、第5集に載っているにちがいないと推測されたが、欠本となっていて確認できない。青山学院大学図書館に再度電話する。「収録されています。欠本の第5集をすぐ送ります」という回答。到着を待って、該当の論文をコピーして郵送。

一件落着であるが、宛名をなぜAoyama Gakuin大学ではなく、Gakushuin大学としたのであろうか。単純な間違いであるのか、それとも……。ベルギー王立図書館には、文献複写を数回お願いしている。ともかく、お世話になっている同図書館に、これで一つお返しのできたわけである。（参考係 久保田安子）

「開架図書室」ってなに？

誰でも一度くらいは、公共図書館を利用したことがあると思う。いろいろな雑誌が、椅子やソファへのそばに展示してあって、自由に閲覧できる。また、単行本も直接手に取って、自分に必要なものを選べる。立って読もうが、そばの椅子に腰掛けて読もうがかまわない。必要なら借りて行けばよい（もちろん、手続きをして！）。図書館に対して多くの人が抱くイメージは、このようなものであろう。

一見暗く、いかめしい感じの大学図書館にも同じ様な部屋がある。玄関に入ってすぐ右側の開架図書室がそれだ。ここには、約390種の雑誌と24,000冊の単行本、そして各種の新書などが利用を待っている。なかでもベストセラーズ・コーナーの本が一番利用が多い。毎月、ベストセラーになったものの中から選んで購入している。藤原弘達の「政治もの」から『たけしくん ハイ！』まで、バラエティーに富んでいる。まずは、開架図書室に足を運んでみませんか。（運用係 入村和彦）

お知らせ

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。これから始まる大学生活の4年間が、みなさんにとって、かけがえのない、すてきな日々になることを、まず祈ります。そしてまた、この目白のキャンパスに、あふれるばかりの思い出を自由に描くことも――。

○「来ぶらり・ガイド」をご覧ください

図書館の開館時間から、図書の探し方、研究室・図書室の利用方法まで――図書館に関する様々な情報

を満載したこのガイドブックを、新入生全員に配布します。ぜひお読みください。また2年生以上で、希望する人は、図書館2階カウンターにおいてください。

○『学習院大学逐次刊行物目録 和文編』を刊行
学習院大学（短大を含む）が所蔵する逐次刊行物（和文）の冊子体目録を刊行しました。図書館はもとより、各研究室・図書室にも備え付けてありますので、雑誌類の所蔵調べにご利用ください。

来ぶらり No.13 1986年4月1日発行

発行責任者：森永 毅彦

編集委員：種田昭平 中山高二

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221